

東京 見聞録



今月の炬火

大竹 美喜氏

アフラック創業者

日本初のがん保険を発売し、昨年設立四〇年を迎えたアフラック。同社創業者である、大竹美喜氏はどのような信念を持ち、何故当時無名のアメリカの保険会社に人生を賭けたのか。「揺れても沈まず」を座右の銘とする大竹氏の話聞いた。

一九七四年、日本初のがん保険を発売したアメリカンファミリー生命保険会社（以下アフラック）。その創業者である大竹美喜氏は、広島県の雪深く人口まばらな地域で育った。

大竹氏がはじめて海を見たのは小学三年生の頃、鉄道で三時間かけ、父に連れられ広島市へ行ったという。

「広島市内で学んでいる同学年に、すべての面で敵わないと思った。だから私は他人が歩いた道を歩かないと決心した」と大竹氏。それ以降、自分はどう生きるべきかを常に考えていたという。

高校を出たら母方の実家で農家を継ぐと決められていたが、地元の市長の勧めで設立五年目の県立広島農業短期大学（現 県立広島大学）へと進学。教授と生徒が同数程度の小人数で、二年間猛烈に鍛えられたという。

卒業間際に、学長から「君はおそらく日本に馴染めない」と言われた大竹氏。

神戸港からブラジルへの移民船に乗ろうとしたが、親族から強く止められ、やむなくアメリカへと渡った。

「それから数知れず色々な運命に会った。生まれ持った宿命は左右できないが、運命は努力次第、心の持ち方次第。そうやって生きてきたことで、アフラックという素晴らしい会社に出会えた」

米アフラックとの出会いを尋ねると、大竹氏は「創業者はフロリダの家に生まれ、父親ががんの悲劇に見舞われて、世界で初めてがん保険を立ち上げた大変な苦勞人。素晴らしい人物で、その人柄に惚れ込んだ。これも神の巡り合わせ、縁を大事にしなければと思った」と語り始めた。

がんの治療費を払えず破産する